

第36号 通巻第8巻第1号

1988年1月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター

TEL 0775-85-4397

〒524-02

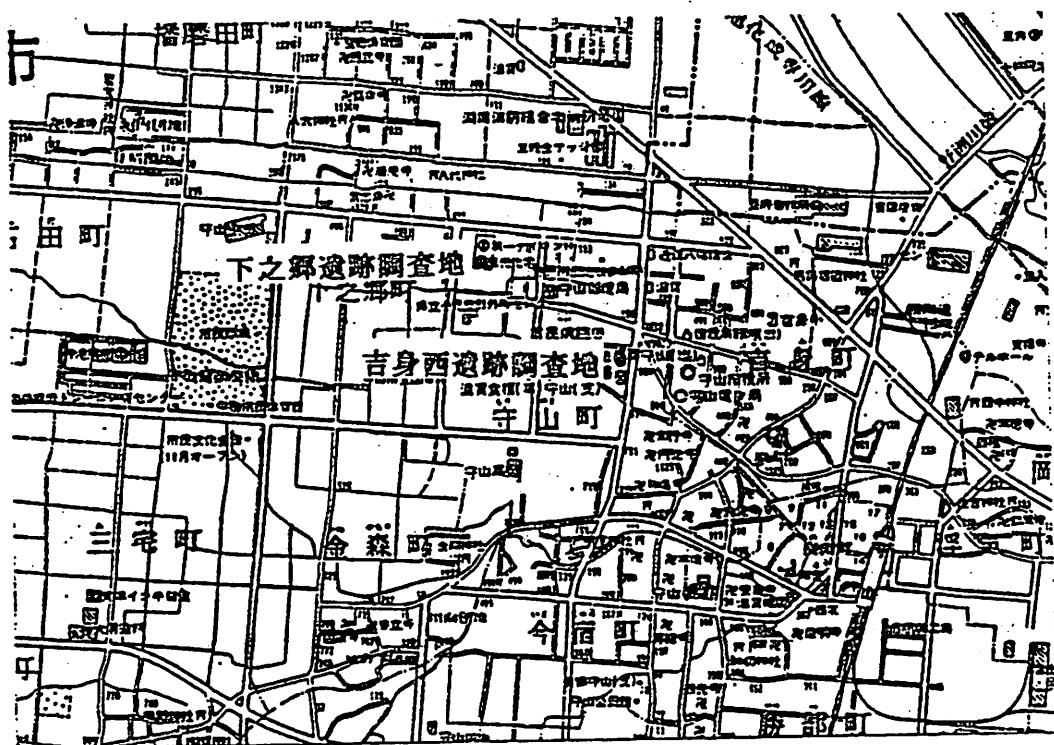
守山市服部町2250番地

「新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事」

(万葉集 巻20-4516 大伴家持)

この歌は万葉集最後の歌、と同時に歌人大伴家持の最後の歌として有名です。新年の雪がしきりに降り積もるように、良い事がどんどん重なるようにという意味です。1988年も今まで以上に良い年であることを祈ります。

さて今回の「乙貞」は、守山ではじめて縄文時代後期の集落を検出した吉身西遺跡と弥生時代中期の環濠集落である下之郷遺跡の調査成果について簡単に報告したいと思います。



発掘調査だより

下之郷遺跡の調査

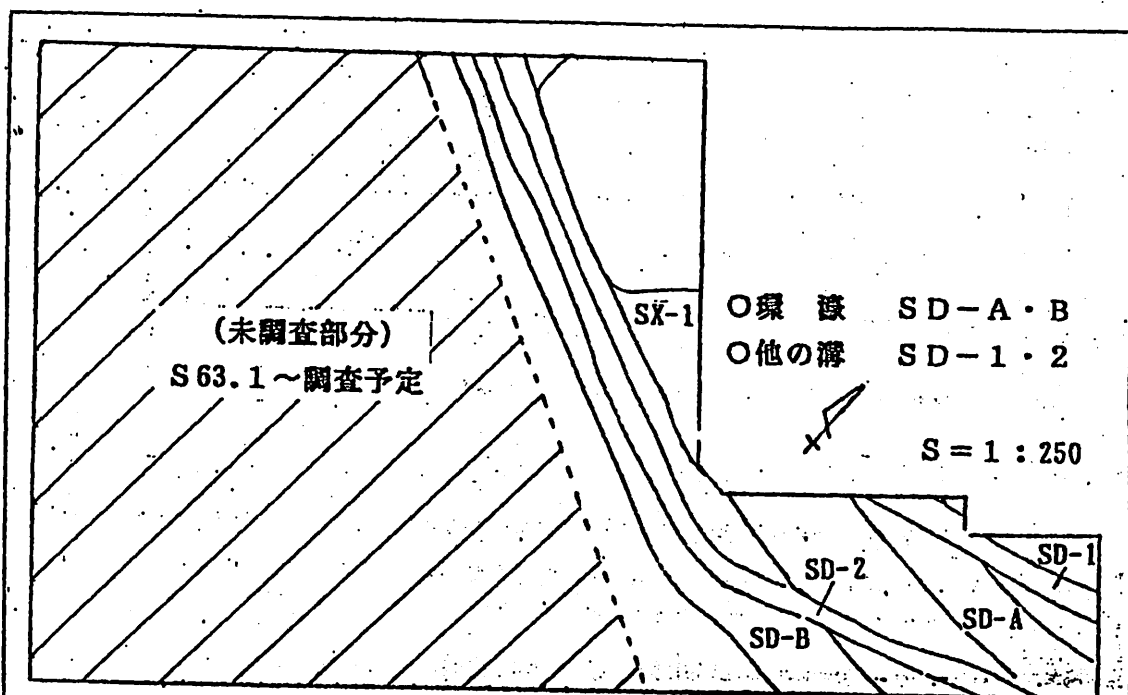
下之郷遺跡の発掘調査を昨年11月下旬より開始し、2月末までの予定で実施しています。調査場所は下之郷町字上黒田708番地、三光化学株式会社工場地内で、およそ1600㎡の広さをはかります。調査開始からおよそ1ヶ月半を経た途中の成果を報告いたします。

当遺跡は、過去に住宅、道路、下水道建設等に先立ち10数次の発掘調査が行なわれ、その結果、「下之郷町集落南半とそれ以南の田畑、宅地に分布する弥生時代の集落跡」として周知されています。その中で、当地西側の市道古高—川田線建設に係る調査では、弥生時代中期の集落のまわりを囲む環濠を3条検出しています。幅約4～5m、深さ約1.5mの大規模な濠は順次掘られたもので、その埋土の中からは多数の土器、石器、木器が出土し、弥生時代中期の生活を知る上で大変貴重な発見であると評価できます。今回の調査でも環濠（現在3条のうち2条を確認しています）とそこから伴出する多数の遺物、当時使われたカメ、甕、高坏や鉢などの土器、石斧、砥石、石ぞく、そして多様な木器を検出しています。木器は土器や石器と異なり、限られた土壌でしか遺存しないものですが、2条の濠（SD-A、B）からは弓、高坏、盤、田下駄、鋤などの生活用品が出土しています。又作業工程が異なる杓と考えられる4点の未製品、作業台、工具類（各種の石斧）は当時の木器づくりが、明瞭に理解できる出土品です。

濠に囲まれた集落—環濠集落は、西日本一帯で調査されており、市内でも服部、三ノ睡遺跡で検出されています。

弥生時代中期、下之郷に形成された集落を囲む濠は長径約200m以上と推定され、その規模を考えると大変な労力を費やした土木事業と言えます。負担の大きい濠建設の必要性については、防禦の施設、つまり外敵から集落を守るために掘られたという説が有力ですが、現在ははっきりとその機能を説明することはできません。

下之郷集落の環濠は、次第に明らかにされてきていますが、今後の課題として、集落自体の調査を進めていかなければなりません。今回検出の濠に囲まれた集落が、一体どの様なものであったかを把握すれば、この環濠のもつ意味を理解できるかもしれません。調査の詳細は次号でも報告いたします。



下之郷遺跡調査地略図

縄文時代の村発見

一吉身西遺跡の調査より

10月から実施していた吉身西遺跡の調査も12月末で終了しました。一部新聞に報道されたように、守山ではじめて縄文時代後期（約4000年前）の村を発見するなど、多くの成果を納めることができました。以下その概略を報告したいと思います。

縄文時代の遺構は調査地北側で発見されました。竪穴住居は4棟見つかりましたが、小穴（柱穴）が数十穴あり、もう少し増える可能性があります。土坑は31基あり、うち8基が焼土坑で住居に伴うもの以外は屋外炉として使用されていたと考えられます。遺構の南端にはレキ群が検出されました。その中には大ぶりの石を楕円形にならべた配石遺構も含まれています。縄文時代の村は中央に広場があり、そのまわりに住居、さらにそのまわりに廃棄の場（貝塚）というようなバームクーヘン型をしているといわれます。吉身西遺跡でも調査地北端を中心に住居がほぼ丸くならび、当時の村がバームクーヘン型に近い構造をしていたことがわかります。

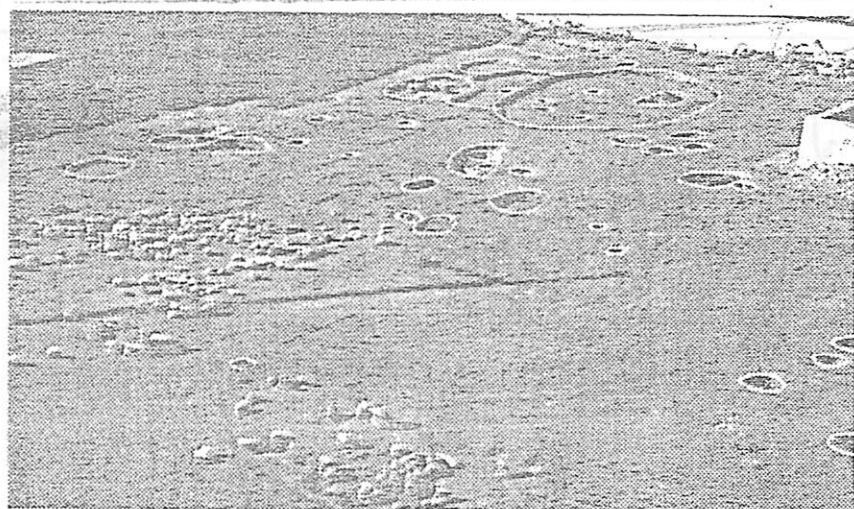
竪穴住居ではSH-1の残存が一番良く、又遺物量も圧倒的に多いと言えます。SH-1は直径4m、深さ40cmを測る円形住居で、床面中央やや南側には炉がありました。遺物は多量の土器を中心に石ぞく、タタキ石、石棒、

石製玉が出土しています。石ぞくは作りかけのものを含むと約30点に達し、そのほとんどがサヌカイト製のものです。サヌカイトの剥片やチップ（削りかす）は400点をゆうに越え、ここで石器づくりをしていたことが想像されます。住居の床面からは、石器を加工する際の作業台と考えられる平らな石や丸い石（タタキ石）が出土しており、この住居が石器製作所としての性格をもっていたことを裏付けています。サヌカイトの産地は岐阜県下呂、奈良県二上山、香川県金山・五色台、佐賀県佐久が有名です。中でも二上山が守山から一番距離が近いことから、吉身西遺跡で見つかった多量のサヌカイトは二上山から運ばれた可能性が考えられます。当時は物々交換で、獣の肉や皮などと交換して手に入れたサヌカイトの原石をこの住居で石器に加工していたのでしょう。その他住居内からは男性のシンボルを形どった石棒が見つかり、石棒は縄文時代中期に中部地方で成立した男根状の石器で、狩りでの豊猟などを祈る祭りや儀式に使われたものといわれています。石棒は大型品は屋外で、小型品は屋内でまつられたといわれます。今回見つかった石棒は小型品で、太さ3cm、長さ4.7cmで途中から折れています。おそらくこの住居内で何等かの祭儀に使用されていたのでしょう。

県内の縄文時代の遺跡は、琵琶湖畔の米原町磯山城遺跡（早期～晩期）、守山市赤野井遺跡（早期～晩期）、瀬田川沿いの石山貝塚（早期）、比叡山山麓に広がる大津市穴太遺跡（後期）や滋賀里遺跡（晩期）が有名です。しかし、今回のように住居跡が見つかり、当時の村の姿が浮かび上がった例はめずらしいと言えます。4000年前の守山の縄文人達は、共同で狩りをし、共同で神をまつりながら暮らしていたのです。獲物をかかえた大人達が狩りから帰り、夕食支度が始まるかたわらで子供達が駆け回っている、そんな様子が目に浮かぶようです。



SH-1 出土石棒



縄文時代遺構

SH-H2

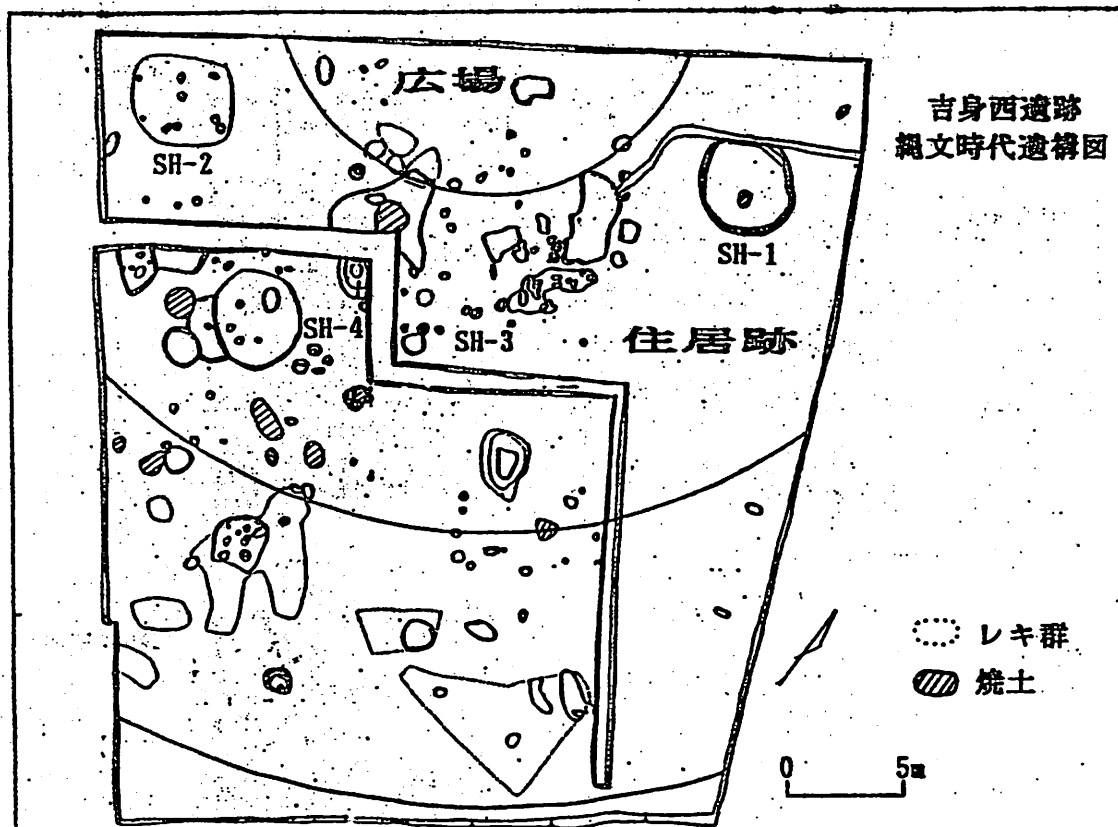


SH-1

(石器工房跡)



配石遺構



吉身西遺跡現地説明会開催

去る12月6日(日)、吉身西遺跡の現地説明会を行いました。あいにくの空模様にもかかわらず、約60名の参加者をえることができました。参加者は、守山ではじめて見つかった縄文時代の村を前にし、熱心にその説明に耳を傾け、遠い原始の時代へ思いをはせていたようです。石器工房跡から見つかった石器や原石にも質問が相次ぎ、説明者がたじろぐ一幕もありました。今後も一回でも多く、このような機会をつくっていきたいと考えています。

編集後記

この冬は近年まれにみる暖冬で、あまり雪にもお目にかかっていません。スキー場も軒並雪不足で関係者やスキーヤー達を泣かせているようです。しかし、おかげで遺跡調査の作業は順調に進んでいるようです。雪のない比良山はもの足りない気はしますが、このまま暖冬が続くように願うのは、寒さが苦手な私だけでしょうか。春が待ち遠しい今日この頃です。

M. M